

「握手」→「手を握る」、「薬を服用」→「薬を飲む」

「年々でも相手の話している声が聞きづらくなる」。そんな高齢者の悩みを解決しようと、話し掛ける側が言い換えや発声を工夫する「リアフリー」の取り組みが注目されている。言い換え用の電子辞書が開発され、企業向け研修会も開かれている。難聴は認知症などのリスク要因とされており、聞けないからと閉じてもらがちな高齢者の介護予防にもなりそうだ。

言い換えや発声で聞き取りやすく

3月、東京・羽田空港のソラシドエア東京支社。客室乗務員らを対象にした「聞き間違えない話し方講座」が開かれた。

「年を取って難聴になった人は音が濁って聞こえる場合があるので、大きな声を出すだけでは不十分。低い声でゆっくりと、言葉の言い換えも有効です」

講師を務めたのはパナソニック補聴器の光野之雄さん。「例えが『握手』と『握手』、『佐藤』と『加藤』は紛らわしい。まず字音が聞き取りにくくなるからです。『手を握る』と言ひ換え、名前をフルネームにしてみてください」



「聞き間違えない話し方講座」に参加したソラシドエアの社員ら＝3月、東京都内

企業研修会や商品開発

と話す。

同じグループのパナソニックは「薬のリアフリー」社会を目指すプロジェクトの一環として、AI(人工知能)による言い換え用デジタル辞書を開発。参加者はこの辞書を片手に、適切な言葉を探した。

参加者からは「お客さまが『定刻を』『警告』、『整備』を『整備』に聞き間違えることがある」との声も。客室乗務員の女性(30)は「ゆっくり話すようにしているが、今

後は言い換える工夫もしたい」と話した。

加齢による難聴は高音域なことを中心に30代ごろから次第に進むとされるが、気が付かない人も多い。慶応大の小川郁教授(耳鼻咽喉科)は「高齢化や、騒音などの環境にさらされるのが難聴の要因」と指摘。ヘッドホンで長時間、

大音量の音楽を聴くことも避けた方がいいという。

小川教授は「難聴が認知機能の低下や、うつ病のリスクを高めるという研究結果がある。話が分からないから外出せず閉じている悪循環も起きやすい。脳が受け取る言語情報が減らさないよう補聴器などで早めに対処することが重要」と話す。



落ち着いた声でゆっくり丁寧に

どんな話し方すれば、高齢者にとって聞きやすいのか。話の専門家フリーアナウンサーの川邊勝美さん(52)は「神戸市西区、写真」に気を付けるポイントを聞いた。

また、一気の説明するのははなへ、二つの文章を短く、途中で「はい、はい」は必ずしも必要ない。敬意は払いつつ、ゆっくりと話すなど伝える工夫をしてほしい。

また、一気の説明するのははなへ、二つの文章を短く、途中で「はい、はい」は必ずしも必要ない。敬意は払いつつ、ゆっくりと話すなど伝える工夫をしてほしい。

中藤教授は「高齢化で難聴の人は増えるが、補聴器そのものの高機能化や支援機器の開発で、難聴になった高齢者の生活の質を上げられる可能性が高い」とみている。

女性の高声は響いた、聞き取りにくい。女性は少し抑えめの落ち着いた声で話してほしい。特に聞き取りやすいのが最初の音。あいうえおで始まる場合は聞き取りやすいがそれ以外は難しい。「かわべ」なら「か」の発音はゆっくり丁寧に話そう。

また、注意してほしいのは、口を大きく開けて話すことも大事。そうすれば、口を大きく開けて話すことも大事。そうすれば、口を大きく開けて話すことも大事。

また、注意してほしいのは、口を大きく開けて話すことも大事。そうすれば、口を大きく開けて話すことも大事。

また、注意してほしいのは、口を大きく開けて話すことも大事。そうすれば、口を大きく開けて話すことも大事。